

ない。  
 気持ちを正直に表現する  
 ことは、決してほしたくない  
 ことではないようだ。社会  
 全体が、人々の感情の表出  
 をなにごともなく受け入れ  
 ている。人間は、笑うし、  
 怒るし、泣くのだ。こんな  
 当たり前のごとを覆い隠す  
 必要などない。それにして  
 白人オーストラリア社会



ダグラグ村の人々に限ら  
 ず、オーストラリア北部の  
 辺境地域で出会ったアボリ  
 ジニの人々は、感情にとて  
 も素直だった。大声で笑い、  
 激しく怒り、わんわん泣く。  
 そしてまた笑う。感情と言  
 葉のあいだ、身体と頭のあ  
 いだが直結して無駄が  
 も、かれらはどうしてこう  
 も「まっすぐ」なんだろう。  
 深くまっすぐに生きる—  
 なんと困難な道だろうと僕  
 には思えてしまう。

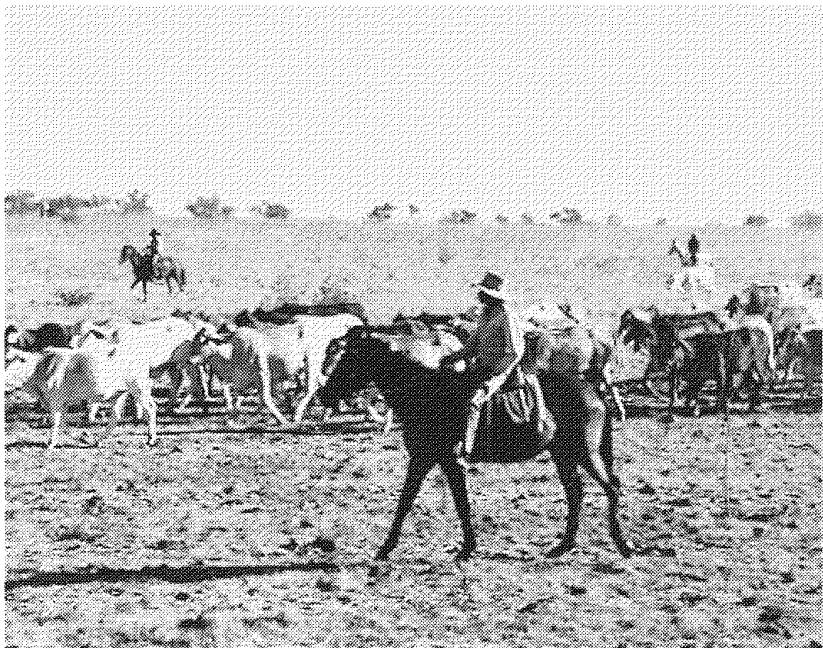
が虐殺された。ライフル銃  
 で撃たれたり、毒殺された  
 りした。白人の持ち込んだ  
 伝染病が蔓延して死んでい  
 った者も多い。生き残った  
 人々も、オーストラリア社  
 会の最下層民として、ずっ  
 と差別と貧困に苦しんでき  
 た。

白人が入植して以来の、  
 オーストラリア先住民社会  
 の歴史は悲惨である。大勢

苦難の歴史

白人支配、虐殺と文化抹殺

貧困や人口減少には対策ら  
 しい対策をたててこなかっ  
 た。  
 二十世紀になると、さす  
 がにアボリジニの保護が深  
 刻に叫ばれるようになる。  
 だが、かれらを強引に西洋



牧場で働くアボリジニ労働者 (写真提供=ダレル・ルイス)

己決定権などが政策に反映  
 されるようになるのは、よ  
 うやく一九六〇年代以降の  
 ことである。  
 とはいえ現在でも、アボ  
 リジニ社会の多くは、高い  
 失業率、低い平均寿命、ア

子供を泣きやませるよう母  
 親を脅した。ますます怖が  
 って泣き声をあげる子供の  
 前で、白人は母親を殴り、  
 蹴り、最後に銃殺した。死  
 体は焼かれ、川に流されて  
 証拠は隠滅された。祖母も

それでも、かれらは歪ま  
 ない。長老たちは、まっす  
 ぐに怒った後に、まっす  
 ぐに笑う。「もうあんなこと  
 はあってはならない。おた  
 がいに学びあって、一緒に  
 暮らしてゆけばいい。その  
 方がずっといい」。そう言  
 って笑っている。  
 (歴史学者「新潟市出身」)

自分たちの植  
 民地経験を語る  
 とき、アボリジ  
 ニの長老たちは  
 声を荒らげる。  
 ある長老は、祖  
 母と母親の両方  
 を目の前で殺さ  
 れたという。ま  
 だ子供だった彼  
 は、白人を怖が  
 って泣いてい  
 た。この白人は、  
 子供を泣きやませるよう母  
 親を脅した。ますます怖が  
 って泣き声をあげる子供の  
 前で、白人は母親を殴り、  
 蹴り、最後に銃殺した。死  
 体は焼かれ、川に流されて  
 証拠は隠滅された。祖母も

は、長いあいだアボリジニ  
 の人々を「絶滅する運命に  
 ある劣等人種」と決めつけ  
 て自分たちの植民地化を正  
 当化し、かれらの聖なる土  
 地を奪い、労働力を使役し、

化・近代化しようとする同  
 化政策が採用された結果、  
 今度は伝統文化の抹殺が始  
 まった。そんな同化政策が  
 あらためて批判され、アボ  
 リジニの人権、先住権、自

僕がこれまで綴ってきた  
 ような、狩りや儀式といっ  
 た豊かな生命世  
 界を維持してい  
 るアボリジニ社  
 会は、こうした  
 植民地主義の傷  
 跡をもろに引き  
 ずっている社会  
 でもある。

ダグラグ村から見える小  
 さな丘がある。かつて、白  
 人に追われたアボリジニの  
 人々は、この丘に逃げ込ん  
 だ。すそ野を周回しながら、  
 ライフルを撃ち続ける白人  
 に対して、アボリジニたち  
 は丘の上から槍を投げて応  
 戦した。多数が死んだ。長  
 老たちは、ライフルを構え  
 る白人の格好を真似しながら  
 「やつらは、犬でも撃つ  
 かのようにわれわれを撃ち  
 殺していった」と語った。